

私のすすめるこの1冊

平井 恭子(幼児教育科 教授)

『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』

スティーヴン・マロック、コルウィン・トレヴァーセン編

学生の皆さんは身近に赤ちゃんと接する機会が少ないかも知れませんが、親戚や近所に赤ちゃんがいたら、大人がお気に入りの音楽を聞かせたり、童謡や子守唄を歌ってあげたりする場面を見たことがあるのではないのでしょうか。このように音楽を用いた親子の触れ合いはごく自然な光景ですが、まだ言葉もわからない赤ちゃんや子どもは、どんなふう to 音をとらえ、音楽や歌を聞いているのでしょうか。実は、赤ちゃんへの歌いかけ方によって、赤ちゃんとの絆を育むことができるということが最近の研究から、次第に明らかになってきました。人はなぜ、なんのために音楽をするのか。この究極の問いに対して答えの糸口を示してくれるのが、今回ご紹介する「絆の音楽性」です。

20世紀後半以降、赤ちゃんにも音楽に対する高い感受性があるのではないかという発想から、音楽に関わる生得的基盤がどこに由来しどう育つのかという点に研究者の興味が集まっていました。つまり「音楽」対「人」の二項関係の中で音楽性が語られていたのです。しかし、この本の編者である、トレヴァーセンとマロックらによる「コミュニケーション・ミュージカルティ Communicative Musicality」の概念は、人が本来もつ能力を基盤とした「人」対「人」の関係性の中に動的に発現するものこそが音楽性であると捉えており、この点でこれまでとは異なる考

え方を呈しています。例えば、乳児と母親の間に成立するやりとりには、時間的流れの中でリズムを共有したり、お互いに調律し合ったりする現象が見られ、これがきわめて音楽的だと彼らは指摘しています。音楽性とは、人生のはじまりの時期から見られる直観的で情動的な人と人との関わり合いを支えるものであり、生涯にわたって形を変えながら多様な関係性を支えるものだと考えられているのです。

私自身も、我が家の2人の子どもたちの音楽行動を長年にわたって調査する中で、母と子の言葉や動きのやりとりはもちろん、きょうだい間に見られる音声や身体の動きの中に、多くの音楽性の芽生えや育ちを見出してきました。そして、現在は勤務先である幼稚園の子どもたち同士の会話や動きの間に「コミュニケーション・ミュージカルティ」の原型ともいえる姿を数多く見ることができます。この本は、そうした人と人とのやりとりの中に存在する、生まれながらの生物学的／心理学的音楽性の起源や、発達、癒し等の機能について、実に様々な研究分野から深い知見を私たちに示してくれます。単に子どもと音楽との関係を考えるだけではなく、人が人であること、人と人とのつながりの基盤がどこにあるのか、など、現代的課題に対するヒントもたくさん隠されていますので、是非多くの方にご一読いただきたいと思います。

第33回うたとおはなしの会

報告

平井恭子（幼児教育科教授）



令和に入って初の「うたとおはなしの会」が、12月14日(土)に開催された。当日は朝から晴天に恵まれ、会場には開会前から続々と親子連れが集まり、115名の参加者でいっぱいになった。まず、図書館長のあいさつに続いて、学生たちが「シングルベル」を歌いながら登場すると、手拍子をしながら一緒に口ずさむ親子の姿も見られ、これから始まるお話に期待をよせる気持ちが伝わってきた。

最初の演目、パネルシアターは、こたつの中に何が隠れているか言いあてるクイズになっており、演じる学生が「♪な～にかかくれてる?」と歌いかけるたびに、子どもたちは身を乗り出して「ねこ!」「ぬいぐるみ!」などと、元気に答えていた。そして、最後にサンタさんがこたつから出てくると、言い当てた子どもたちは満足そうに笑顔を見せるなど、すっかり打ち解けた様子だった。

続いて、「とんとんとんとんひげいじいさん」の手遊びをクリスマスバージョンで楽しんだ後、絵本「サンタさんとこいぬ」(長尾玲子、作/絵)を鑑賞した。この絵本は登場人物がすべて刺繍で描かれており、子犬とサンタさんのほのぼのとしたやりとりに、会場全体がほっとした雰囲気に包まれた。

絵本の世界に浸った後、会場の奥からマリンバの音が聞こえてきて、森の音楽家に扮した学生が大きなマリンバとともに登場した。子どもたちは初めて見る本物のマリンバに興味津々の様子で、「そりすべり」(ルロイ・アンダーソン作曲)の演奏が始まると、楽しそうに身体を揺らしなが

ら聞く子どもやじっとマレットの動きを見つめる子どもなどが見られ、演奏が終わると大きな拍手が起こった。続いて、マリンバと一緒に子どもたちも打楽器をもって「おもちゃのチャチャチャ」の演奏に加わり、参加者全員が心を一つにして楽器遊びを楽しんだ。3歳の子どもと参加した保護者は「マリンバの素敵な音色に親も子も癒されました」「小さな子どもが気軽に生演奏を聴けるこの機会はとっても貴重です」と喜んでいて。

そして、最後の演目「ヘンゼルとグレーテル」の人形劇が始まった。このお話の見どころは何といても、魔女が住む「お菓子の家」である。森の中に迷い込んだヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけ、中から魔女が現れる場面では、魔女が怖くてお母さんにしがみついたり、半泣きになる子どもの姿も見られ、子どもたちは学生が演じるお話の世界にぐっと入り込んでいる様子だった。1歳と4歳の女兒を連れて参加した保護者は「お菓子の家が素敵で、思わず“わぁっ!”と声が出ました」「魔女の演技がとても上手で引き込まれました」と、感想を述べていた。

劇が終わると、サンタの帽子をかぶった幼児教育専攻1回生19名が登場して「ドレミのうた」を合唱し、楽しい雰囲気の中、閉会した。出口には学生がフェルトで手作りしたクッキーが飾られた「お菓子の家」が設置され、子どもたちは、ヘンゼルやグレーテルになったつもりで嬉しそうにお土産のクッキーを選んでいった。終了後のアンケートでは、「お話に入り込んで見ている娘の姿から、学生さんの思いや気持ちを感じました」「子どもが参加できるお話の会は、見ている親の方もとても楽しいです」と、子どもを通じて保護者自身も楽しさや嬉しさを共有している様子が伝わってきた。これらの意見をふまえ、「親も子も参加してよかった」と思える会になるよう、さらなる努力を重ねていきたい。



京都教育大学
それはかなう夢講座

第19回を実施しました

12月17日(火)、附属図書館1階のリフレッシュラウンジにて「それはかなう夢講座」が実施されました。第19回は、国文学科の中俣尚己先生による「数字で切る!日本語」をテーマに、お話しがありました。40名を越える参加があり、多くの学生や教職員で賑わいました。



主催:「現代的ニーズを踏まえた「理系」教員養成のためのカリキュラム開発」プロジェクト委員会
後援:京都教育大学同窓会・京都教育大学附属図書館

「先生になりたいーそれはかなう夢」は、京都教育大学のシンボルフレーズです。



職場体験報告

11月6日(水)から8日(金)にかけて、深草中学校から職場体験実習の生徒3名を受け入れました。カウンターでの貸出・返却業務などを体験してもらいました。みなさま、ご協力ありがとうございました。

※職場体験の中学生とともに重複雑誌や古くなった軽読書などの消印処理を行い、リフレッシュラウンジに移動して展示しています。こちらの図書はご自由にお持ち帰りいただけます。



日曜開館を実施しています

試験期間前の日曜日(1月26日、2月2日)を9時から17時まで開館します。試験勉強などにぜひご利用ください!

リクエストと投票で話題の本を読もう!

学習研究以外のリクエスト本を一定期間掲示し、皆さんの投票で購入する本を決定する企画です!

1月の投票期間は
1月6日(月)~1月20日(月)

学修相談カウンター

理数系の院生がいろいろな質問に対応してくれます。勉強や就職のこと、先輩に相談してみませんか?



ブックハンティング in 河原町

11月20日、27日の2回に渡って丸善京都本店にて、今年もブックハンティングを実施しました。7名の参加者に合計108冊を選書してもらいました。

「自分では買えない本を選ぶことができた。」「普段手に取らない新しい分野にチャレンジできた。」「思う存分、本が買えて満足。」などの感想をいただき、どの参加者も広い店内で多くの本を手にとって、取捨選択に迷いながら選んでくれました。

来年度も実施予定ですので、新しい発見、賢沢に本を選ぶ機会を、ぜひ体験してください。



1月に本とともに感想や紹介POPを展示します!

児童書コーナー (南館1階)

幼児教育科主催
えほんのもり

学生作の
チラシ

学生による絵本のよみかき

- ★1月6日(月) 14:30~ 『ふしぎなおじさん』他
- ★1月20日(月) 14:30~ 『14ひきのさむいふゆ』他



今月の絵本カード (学生作)
『てぶくろ』
ウクライナ民話
訳:内田 莉沙子
出版社:福音館書店

※児童書コーナーに展示しています。他にも毎月かわいいカードが飾られていますので、ぜひ見に来てください。

教育資料館 まなびの森ミュージアム

<今月の逸品:12・1月展示>
太政官札

展示場所:図書館

【次回の開館日時】※1月は休館です
<卒業式>
3月25日(水) 9:30~12:30



教育資料館 まなびの森ミュージアム
<https://www.kyokyo-u.ac.jp/museum/>

京都教育大学紀要(大学発行の学術雑誌)に掲載された論文を、執筆した先生本人にご紹介いただくコーナーです。

論のくちび理のむすび

今回の執筆者 卷本 彰一(理学科 教授)

化学の原典の教材化 —パストゥールによる光学異性体の分離実験とその教材化—

卷本 彰一・福田 佑樹

京都教育大学紀要. 2019, No. 135, pp. 95-104.

化学の原典の教材化とは、化学史に刻まれる偉大な業績となった実験をできるだけ当時のやり方で追試するものです。教科書は客観的に内容が記載されていますが、逆にそのことが生徒に文言を「文字の羅列」に見せ、内容を「単に覚える知識」とさせている可能性が常にあります。教科書では一言で書かれている専門用語でも、実際には多くの先人がその発見や成立にかかわっており、その文言の中に多くの人の熱き思いや苦労が隠されています。それゆえ、化学の原典となった事象を教材化するという事は、単に理解を促すためだけの実験にとどまらず、発見者がその時に何を考え、何に苦闘したのかという生き様をも学ぶことができ、生徒にとって大変よい教材となるはずです。

パストゥールは細菌学者ですが、1848年に酒石酸の光学異性体(鏡像異性体)と結晶形との関係を明らかにする、という化学にも大きな業績を残しています。炭素原子は最大4つの原子(または原子団)と結合できますが、4つの各原子を結ぶとその形は正四面体となります。もし、4つの原子団が全て異なる場合は、右手と左手のように重ね合わせることができない一対の鏡像異性体ができます。その一対の鏡像異性体を混合したものをラセミ混合物といますが、パストゥールはラセミ混合物の溶液から自然分割で一対の鏡像異性体をそれぞれ結晶化して、結晶自体が鏡像関係にあることを発見しました。炭素が正四面体に結合するという概念が一般に知られる数十年前のことです。

パストゥールの実験を追試すると、彼が専門外にもかかわらず、素晴らしい結晶化の技術を会得していたことが判ります。発見は、たまたま室温が自然分割による結晶化の温度に適していたという幸運に恵まれましたが、彼が天才であると同時に大変な努力家であったことがうかがえます。鏡像関係にある1対の結晶を見比べると、約170年前の彼の感動がよみがえってくるようでした。

興味のある方は、専門的な内容で恐縮ですが、論文を一読いただければ幸いです。

※本タイトルの論文は京都教育大学紀要 135号に掲載されています。

※京都教育大学リポジトリ「クエリ(KUERe)の森」<https://ir.kyokyo-u.ac.jp/>に掲載予定です。

開館日程 □9:00-21:00 ■9:00-17:00 ■休館(CLOSED)

2020年1月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

1/6 授業再開

1/18-1/19 センター試験

2020年2月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

2/4-2/10 後期末試験

2/25-2/26 前期入試

●京都教育大学附属図書館ホームページ

<http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/>

●携帯版 OPAC

(QRコード→)

<https://tosh2.kyokyo-u.ac.jp/webopac/mobtopmnu.do>



京教図書館 News No.232 (2020年1月号)

発行日:2020年1月6日

編集発行:京都教育大学附属図書館

問い合わせ先:library@kyokyo-u.ac.jp

国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION